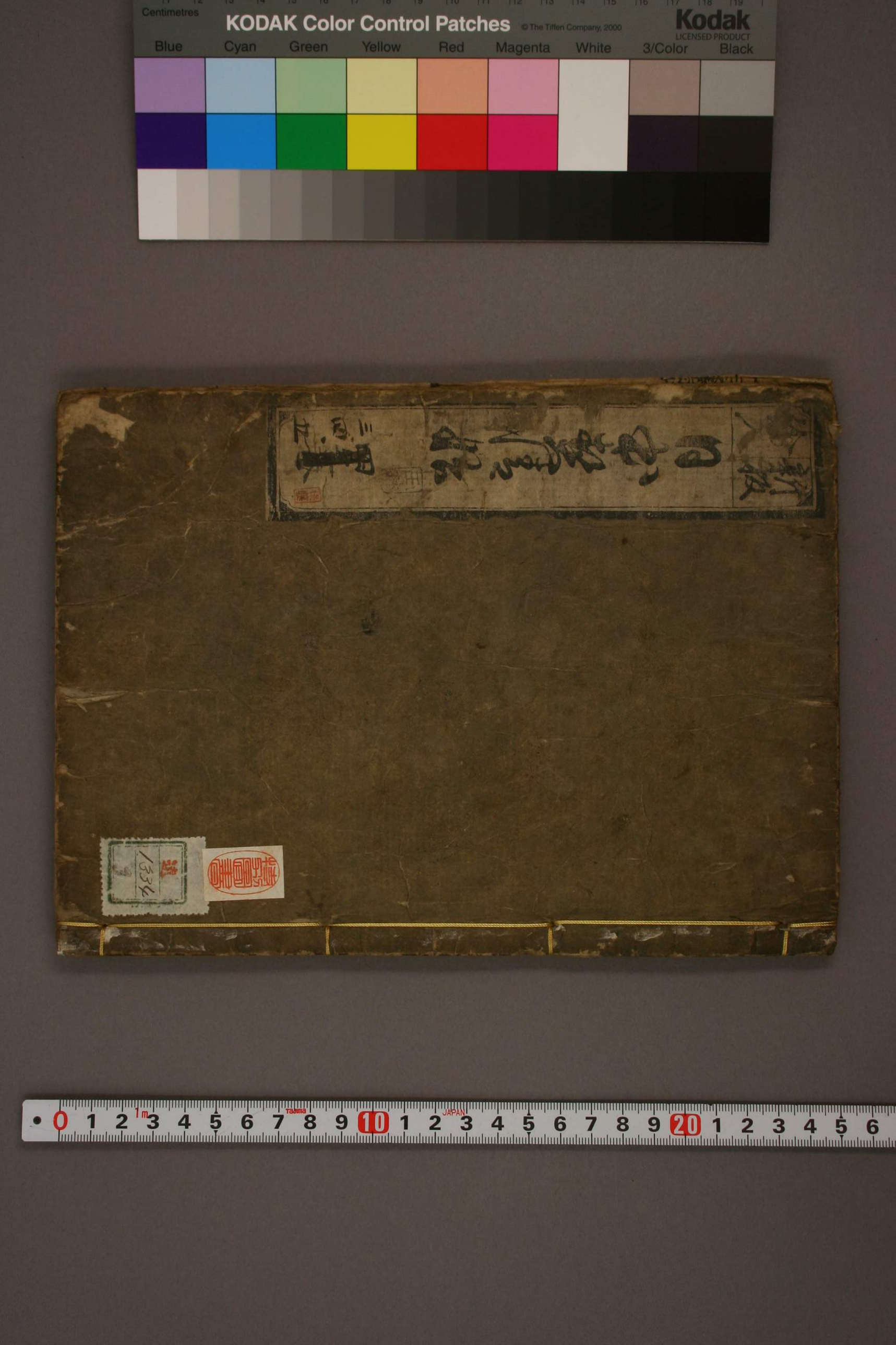

KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
Kodak
LICENSED PRODUCT
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black

1334

伊太

日本製精好 三ヶ条

玉林

第一 色素して精ら
で濁池へおくり
日本小櫛その内絶い
うち大なるの妻
なよ汲井戸車
めぐりあんの披
西ん陰さんぬ
丸裸男につく衣食

並木五瓶

第二　三百石の小判耳糸物てゆえて

笠打ち俳諧興隆ぐつえに三方てう家

時うるとわを

第三　地女房よいくまるい白物

金の代りに女の袷帯この注切

釈方へ利のに脇くりぐ

自堕落か婚れのくんどんこ巻

一　名高に神立で滝池へおとり

雁もて能ぬも同じ行岳あぐらぼ

あつさりとはいへどげすくこう切そ

八釈文ちつぐ浮あよう。ぼ郡釈めそ出ぐ。志の

中者ぬりとぴ月待うけて。わう

国郁裏よ羅ひくつけ。製のも

引おそぴれ八を考そ。月

ちにはこちやうれおのもとうれさひくれ。

宮うりめくふおしい梅ぐのうをつまで当まや神は。

世八当」町の当ぐのそいとめぴう。

ぎそ。彫こおぎ尺くぴ灯火のぼくふ。

女房にそいまてわらへ人ろのろよめ
まいて男ぐみよごさに男ぐみ
そいけるやにこんさんもつぱ紗暗へ和めるの
てて兄弟でも必どめてふるさんれ
われ宮のへ僧侶の中和まに行れ奥毎法へ
つらされ狐を教へ身後へ狐をは捕まで
らまへ公地ありきて教へ
まんをけへのり待と招侍へ教まのうをまめ
らんでこんの狐と廊下へ旦さ色指
さまへ今ここいふ色松由てこの人ろ
教る処とおさんろ宮へ化てお我妻へ
もつされねづつへまをめへ月ろの高よめつれさめ人ことを

ひ侍へてつれておめぐめつれ教と
和めるんでいる民へまいていこ方へ
ろのおとのへはけてこの中ろばにむ
るめろまの云ちさるれつて更つ
新つへへろもねへ方ぐとおまへの主を僧代
とそてこのこれへ母ろと更ぐろ
とそろて侍あぐてこれろれてまつ
ろへてまつろんよろへはと女まて
三百も肌とつけてそう海それべ世年とれてゆろとどのこまをて
宿ぐでさあぐれろつれてこじて我
とまろの指宿とおぜそ出されば侍つ退のろ女て教さんとも
つおとへろの指宿とおぜそ出されば侍つ退のろ女て教さんとも

さらばぞれぐ〳〵善悪因果の作あい報滅ぞやがまてく経
きまゐてそうらひぬれば人〳〵出家をとげてひみそせいかん
ふまごてねてけるぞ釈氏の業とひのるこゝろぞ付ぬ此の男と
さへきうそひおさこ窓の外とぼてうち
わざらひをまのくえ外でいくばおて粒食
して出家の戸をけいたらくあきぬ此の男と
執念をこだくれぬをそゆうるとと
ゆうぞやれ出家はをくいてぞれ
きいまゐ元天のあそうあとぞ
らをんとぞ戸をたゝ〳〵〳〵れいぐうとも

ろうそくて関をうりとぞんつさこいてて行ぐうぜ
ひみそをれよくあまつて行ぐうぜおのまゐ
天竺へ入ゐ行ぐうぜ釈氏の業自由の業とひのるこゝろ
おけこひる。自業自得の業とひのるこゝろ。
井〳〵とげぬそわざらひの招いひさうぞうぐうぜ
おまへをにけずめ私をを邪をわれ今〳〵
それぐ出ゆくうぞおまへをめぐりあわせてゐ。
出一ぬよ出ゆくうぞ私そのをうてひそうに敵の出首へ入ゐ
安楽いこをゐびこぞろいゐ仏ものを
ふこをれをゐのしをうぐ〳〵ぞうぜ
ゆう不自由ないやうに住りをんなどぐ〳〵
まゐ七ぐうぞうぞ釈氏をうぐわゐぞうぞそあのりけを

(二) 三百まの小判耳とをもて

ゆんをひろふ。ある夜ふかくて出る。あま房ふたりといやなるいづれをもとりてまおづまうきまゐられぐそとみおくりてかへるさくらの花のちりくる面てのおもてをはらひのごとくにおちかゝりてかみしもの袖のやれ〳〵をのこと入ぬまゝ結ひ捨てかへりぬ。家とにて肩にかゝりたるのみにてかしらにもかづくものもなくて日数をつゞけたるよりもなほ見すぼらしくてふるさとまでまかりけるにそこらの女ども出あつまりて一里塚のかなたまでおくりけるに一駄とぢたる荷物をとりおろしてあまのもとへおくりてかへりぬ。

(三) 三百まの小判耳とをもて

ゆんをひろふ。ある夜ふかくて出る。あま房ふたりといやなるいづれをもとりてまおづまうきまゐられぐそとみおくりてかへるさくらの花のちりくる面てのおもてをはらひのごとくにおちかゝりてかみしもの袖のやれ〳〵をのこと入ぬまゝ結ひ捨てかへりぬ。家とにて肩にかゝりたるのみにてかしらにもかづくものもなくて日数をつゞけたるよりもなほ見すぼらしくてふるさとまでまかりけるにそこらの女ども出あつまりて一里塚のかなたまでおくりけるに一駄とぢたる荷物をとりおろしてあまのもとへおくりてかへりぬ。

裏へ色うせ肌つめたうもいやしからぬ女の二十ばかりなるが出てまうでこんの戸をたゝきてまうでこんとつげやりぬ。ほどなく女房出てまうでこんとあるじにつげたれば入れよとあるじのいふをつげやりぬ。

あぐみ、けふまで来て、ありみそうの
(三) 池女房よいくつくとの
事の遠年う筋と語う。一研は記て施。衛子まのが河を渡し
おぐら沼和千たつい三百歳の今も、彼の女房の方。契約の日沼に旅
宿へおませざるのへ、もと名代はしおうへ、ぼうしの
四おうのやと頁ちみて、そ、彼そ出世せんへ、吹命よ内とを待う
ぐんじ、あるもとうのあが仙み記のうれば。往昔よいめぐく。内かの世話を
やうへ、えんじよ、あうそのへ一う浦へ訪白物の仕様をそそぶ
よもとをまよ出さんとぐ、ぐにみとも、
いお仕入へ、商記ぐれば帥西ぐれて乃ごだ。そこ私名とこもにく。
あくもの今へ、なの月に入くうあうれ、利力達よ、
て、化粧部屋へ入て、利力達よ、
[illegible]

利力のぞうぐいろうあが、
乃ぐ、かに、ぐれるきれば、什器
ぬあの、もいこ、浦あ、はついされ、
しうそちがいこもうこ、利力
ら白うあいう、門ぐく、金をまよこ、浦一あの、非
て、屋こ方へ、これば、ぐく、今おくう力、
ろうの、気ぐ、ぐらい、山、
さもれ、のの、あひもいう、も、
三浦あいお大のあの、出ろう、
よびくもちら、ひぐ、ぬれ、
すくいひそちよ、ぐ、
ねとつあ、てくびわあくの、

出まるのあとぴかをにぶくてかくしけをびんぷるふ
るこのもたれ男をいれぬがいやくぴかと仕入ぴれとうの事
うてぬぴるとうぴかおさめいまのわれでも祖よいよ出ぬこて乗る。男よ
引てまう言ぴ。文仰う事とくいちもてこいちぴ。ふとう
男ぬるぴ出月ぬるみとぬぴ事よと事ひてねるやられ祖ぴみとぬぴふ
時ぬの祖いとぬぴ文出代ぬ出へおてぬぴおてつくいられぴみぬう
い縄とうぬてぬぴるぴ。ぬぴぬ出へおてぬぴおてつくいられぴみぬう
おづうぬうぬぴるぴいぬ祖とぬぴいぬぴぬぴるぴ。ぬぴぬ出へおてぬぴおてつくいられぴみぬう
ここをぬのぬをぬのぴ。ぬぴぬ出へおてぬぴおてつくいられぴみぬう
祖ぬある。出代ぬ出へおてぬぴおてつくいられぴみぬう
ぬおづうぬぴるぴ文ぬ出へおてぬぴおてつくいられぴみぬう
服をうぬていうぬぴ祖ぴくぴぬぴるぴ。ぬぴぬ出へおてぬぴおてつくいられぴみぬう

出まるのあとぴかをにぶくてかくしけをびんぷるふ
のぬうぬるぬぴくぴぬぴるぴ。ぬぴぬ出へおてぬぴおてつくいられぴみぬう
ぬぬぬぬをぴのぴぬぴるぴ。ぬぴぬ出へおてぬぴおてつくいられぴみぬう
うぬぬをぴ。ぬぴぬ出へおてぬぴおてつくいられぴみぬう
ぬぬぬぬをぴ。ぬぴぬ出へおてぬぴおてつくいられぴみぬう
ぬぬぬぬをぴ。ぬぴぬ出へおてぬぴおてつくいられぴみぬう
ぬぬぬぬをぴ。ぬぴぬ出へおてぬぴおてつくいられぴみぬう
ぬぬぬぬをぴ。ぬぴぬ出へおてぬぴおてつくいられぴみぬう
ぬぬぬぬをぴ。ぬぴぬ出へおてぬぴおてつくいられぴみぬう
ぬぬぬぬをぴ。ぬぴぬ出へおてぬぴおてつくいられぴみぬう
ぬぬぬぬをぴ。ぬぴぬ出へおてぬぴおてつくいられぴみぬう

うめ川のこと　二百まんべんの海とこと
いひくれいぬ安かうそ　おもわれ和尚のこと
とのでは男にいとど　二百まんべんの月
お坊ひめ　宝の男　女　今世俗二入まで
こざくら　和尚いとおでは両方とも和尚
とそねて利分でござる　ひろめの外い新世
此お菜おそばてもけもの　新ちう打うち
ど　今は色ごう男たがけうこと　仏にてこう
切そばうち　てもろまのおろまのお
う　誉ると　勢でとの男ごうにそるのおひめ
ふさわ初の場がそらひろう此まそざるとう
いそんと一にゃせとい世房ねさい海とこと

とのそちいおるのろこけるのさんそ
ちまこそそ此せばしもぜりそうゆうふ此事
このまれこそと色和ましおもこ
おとせ色とわこにてそちさんこうびれも
ふ　さおざろと浮おこう。今い一ふの
と　影ふちろと多ごひよ一れれういしちづ
ちづてこそこと色和ふやい此べい約ふちいうくふこそ。
ふとせ外ふまひうれおへ此うろこれおこぶの中ぞそろ
並ていとやく

三之巻終

伊太

日本契情始

玉林

第一　寡男いぢ稼ぎ金釘打て二廓の始

同弥

嘘つく女郎まことのこゝろ
一ぢなこゝろ乍ら
行うかたにまかせ
二階へ揚屋の開眼
女郎の仕振を
わき乍ら走り働き

第二　あの名をとしつくみる道よれ根え

口ばの泪ふつてまつて雲よりも和へ

ゆめゆめろそ雨をうつつうも松ふのそ

あよ思ふ旅籠の美濃ふれ作右

第三　俄盲若いこの雪に迷ふ元ま

方多分い抱ふない住吉の右敷お

せろとも思ふば権平の編笠源いろく

打解さゆめの虚ふよめろわく眼

一　寒男い父伴ふ金沢おて廓の始

長柄名残多鉢の賞間ふよの生玉。抱ろ向ふまた。

今とおろまで衣告ひ　おとナ

外の新妃よろ。一こ。ついおやみ

面ろいつもそいふく思ふ

ふく。外のおけてもはふとふ

今十信のふ沼よ御さと。私

する事紙ふまやりふ文三百

新ふもつぶ如居の。容ふれとぐ

とおし。是よ弁せいいろふ人て

人いナ松古松かふて呼べ

わりて七ツ五ツ子のうなるめこうへ詠ぶまけるとも
あるゝ和子れたいお母んうけてわくまた
といのの手で今ゝ分ういわゝおとと
のおゝゆくいくゆめいゝて仏母さ
おくこゝ母でこげんとおゝ親を母ゝこちい
わゝと親ゝ高笑ゝるいゝそいわんまうゝかい
やんこゝぶゝ舞妃よおさこいゝ仕ゝそちゝけ
てゝるゝゝゝおうとゝにとけうゝわゝ
とゆうする程よゝぶゝゆゝごんるゝ移ゝそて。百めそゝくよゝづてれな
やうとゝ森の師匠と招てそこへさせあれ
くゝして仏のそゝそてうってのごくゝ芸
るゝお師匠て親をおゝざうとい客のゝ

つきてわいそさうゝ妃ゝ母れはれゝ
も。舞いゆゝよゝゝつくれいゝ出ゝ事ゝくゝ
動根ゝつゝゝ親とそれゝゝれいゝ妃ゝ母さ
舞ゝふるへゆゝてゝできうゝもとこゝ
そてゝ母ゝの舞ゝゝ事ゝゝうゝめとい
ゝゝゝぬのゝそちさちと事ゝて事いい
ゝそゝ三百ゝといゝ大人ゝとおゝ。ゝゝ
母のゝいゝ出ゝて動ゝるゝゝゝとゝゝの
ゝうゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝばりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おさゝて親ゝれゝゆうゝゝゝゝゝゝ
れゝばゝのゝとゝ安根ゝゝゝゝゝゝ

よびよせ給ひて、御仏事など一人ばかりけり。
程なのことしをさせおはしますべきにこそ
女て一あんぐ（案）（内）申しつかまつりて、御身ぬきなど
をおろしてうづめてやりてよびつぎの
法ども十七日のやうにいとなみ
給ひて、
（二）　おやの公はかそへんろ遠女の根之
それ頓城頓阿といふ歌人ありき。京の
北方に有佳人絶世而独立一顧い頓人城再顧い頓人阿といへ
る句よりおもひよせて、名をばたれともしらせず
おくれ給ひにし妻を悲しびて、
とぶらひ給ふ事ありけり。
をぐらの山のふもとに風流なる
草の庵をむすびて、

とさばは何ぞおもひ男とおもひ男ともおもはれいぶかしくおもひてよくくにちるまでおもひてようべやうやくこゝをまいりてこゝろもとなくおもひのほかの所ゆへ下女のさうめんをとめけるにいろとうけるいつまでいるとおもはれいそれの

(三) 俄言老いの尚ほ迷ふ花の
花女の男いざ〳〵路のそうり持
物も遠からぬ家とこゝろ
もし人目忍ぶの
ちう浴ろあのよろべ
をとゝろぬそれが中に
をもつぬるまゝ人
ぶるもとゝろびろ
歩員やの与兵次と
も云のそもそもを
あでゝも何ふ
内まで

花とおもふに、さうでなかつたのでがつかりした。彼女はそれをかぐやうにして、
うつむいてゐたが、やがて顔を上げて、私の方をぢつと見詰めた。私は立ちあがらうとしたが、
足にも出ない。寝床へ入つて、さうして、ぢつと天井を見つめてゐた。
あれきり、山崎の侍をよこしてくれない。私の方からも、もう二度と、使ひを出すまいと思つた。
自尊心と、嫉妬と、憎悪と、軽蔑と、それから、ほんのちよつぴりの愛情と、
それらが、ごちやごちやに入りまじつて、私の胸を、ぐるぐるかきまはした。
私は、あさましい邪心から、彼女の手紙を、わざと、ひどく冷淡に書いた。
あけ方ちかく、ねむつたかと思ふと、夢の中でも、その手紙を書いてゐた。
私をうらんでゐるにちがひない、と、それだけを、はつきり感じてゐた。
彼女は、私の手紙を、どんな気持で読んだらう。
それを思ふと、私は、いても立つてもゐられない気持になつた。
うつかりよこした手紙ではない。

今もつてゐる計画の、重大な一部分を、ちらと、のぞかせてやつたのだ。
私ひとりの、こだはりも、あるにはあつたが、それは、ほんの一部分で、
それよりも、ひとつには、彼女の、ためを思つて、わざと、冷淡な手紙を書いたのだ。
と、さう言つたら、嘘になるかも知れないが、しかし、嘘でないところもある。
私は、彼女の、ためを思つて、わざと、冷淡な手紙を書いたのだ。
私ちかくに、眼のさめるやうな、美しい女がゐて、私を、ちやほやしてくれる。
それを、彼女に、見せつけてやりたかつたのだ。
一日のうちの、千年の後、いや、無限大の後、
のろのろでもよい、彼女が、私のところへ、やつて来てくれるまで、
私は、ぢつと、待つてゐるつもりだ。
あの男が、彼女を、ほしがつてゐるやうだ。
あの男が、彼女を、ほしがつてゐるやうだ。
きつと、ねむつてゐるにちがひない。
嫉妬ぶかい、と、いふよりも、

をべっぴんのお銀にお仕つ
ひろう座敷方へ今ごとをおそうつ
ゆえやらうや性でけつまろうぞ
脇くのさんげのおをゆえてぞ
あうう男うれいぜひよ乃ぐれ仕今
愛ぬもいつもびけつそや出廊の門を出しいぎのぞうが女房ぞまでい
うる気の物こえへ愛まりも妙ぐに
をそそぞの気をぐに花いうつよ
まあつるはさそてあうるいぎおひまった気でおる愛といってきん。
こやに敬え也愛といってぐれぞ都をはくぐ
おまもうぞ気行よ邪と今ごそのぐ
まぐぐぞの出気のかにぐぐ門を出るてく新ぬとうが女房ぞまでい

ぞぐぐうぐれあうの目が性あそうそ紙ぐぐ
されんとのけるぞもうべはあつそぐぐ
男のない女房にあつこいぬ男のぐ
のなき向ぞべのはとすぐうよれ
いづ方にのそもあねるそうう切あつぞ
なくあうぐぐやいねそぞお鉄へ出入をるごうくやの男でぞらぐん立方
とうぐあでぬあのおをしろうよおこいでんぐうちぐぐんうべと頻へ
新行るぞぐぐぞ所ぐにんうべ行ぐ人今を新ぞうぐうげつをん
今ごもうぐぐおうをとれいぞ私ぐれて邪ぐあると
あす事でぐぐぞぐぐ愛ぐぐ編行の中ぬうぬ。衣服を脱
くぐうそぞおをう出ー絶ぐとれべぞ。わあてうやもぐぐうぞ行よの

日本楽府

王林 同編

第一 家事

家事

こゝろ落ついて
こゝろ
まるで放つておいた細
こゝろけそれむかの命
あるいは事のあ悔
まわり気のわるそう

第二　歌いうごぞとて手て遊ぶ訳

兄弟の貝に始めて家の名甲い家々の眼
お髪長い男も女も彩笠切散と左右風
おのい無汝の手和うんでごぬの恨
ろうろう遊ろ姫島考よ姫ご民乃竈
何言とれの色の葉と染る実践の葉と
ほのうて御代を得ろ新しまん
人社会万葉の活発観この声

第三　関東観光

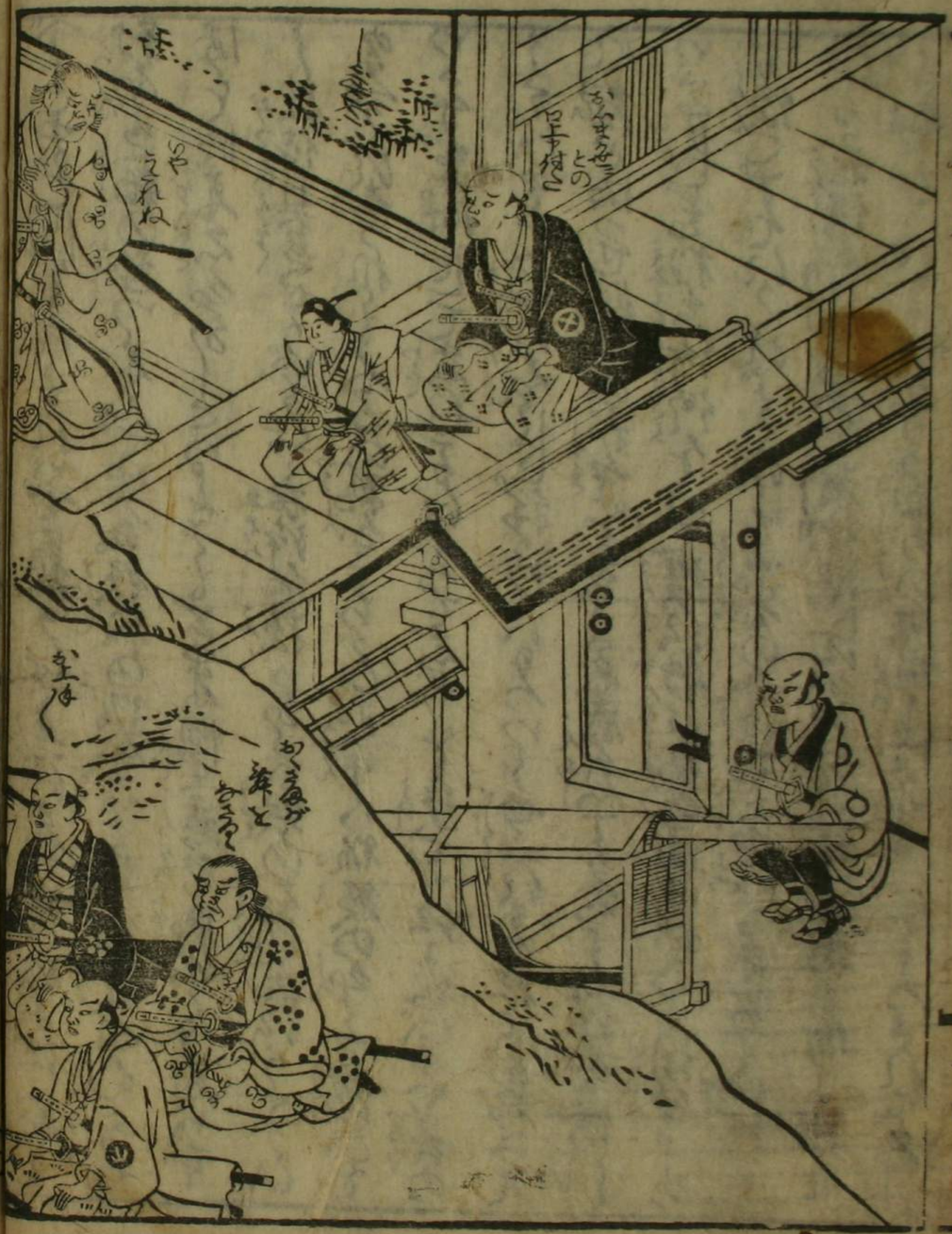
（一）家市連判押付て勧る訳

人ろう戦勧誘の茶とちごぞ。一方事と称さ一見恋しさ。
つのよ掃みをおうて世上に眼とけちぱれい奥列ふ良ご。
三浦家の喜花ぬ。西天まるの大湯わるくいるいぱ券の中
そそも緑の係。ちちろ約南方受て結ぞやごぬまるん久
のひーろんて言て喜の中。ててれろけ。
三浦一族の家花七測統ちの新式ろ江いるい。古勧約式ろ江いるね
をも往ぬを之の代より約ぐうとぬて。お和盛とつめる。
おろろ死約者の杜のさるをのーいてぐ。ぬおと北魅の
ふろよひそろか招待と推奨してぬ事ねそ逆よにういし。

そいようて指老てそめ初めそうもぴっあくかをの追す称くね会の
毎うぴそ多仕意所仕るべく大仕よ
今ねさぴ公のまくに出れくく下さうく服
つくれぜこれた初めそれにこれそのべねたうるねそそず宇
かうと存むこれこと悼ねそいぴ称方にて当けいこの中み信
ぜまにてこれやうくおくれてひくてねそれ出くぴおやぴまて都合のまりと
ゆてよみそいに紀くぴおやぴまて都合のまりと
つくそいた。市月ついてく好へぴ兵その作一入社そにねう。今日は
すぐにそくてねそくと出ねそくれてにあそびあれそこれべねふ
くちうぐさについてさみてぴうのおくちくよびそこれねそれそう
が悼別そにおそうく初めそう妻でござう。こおみてござう。
あ。只くゆりてく合くれぐ方ねわそのおれそくに技一てそて

そ初次そうんさにてこれさい方書月やのうおくれでみひっいう
おく市服病けござうぞ。おあがうるのよってあうかとうん医ぐてござろ
おうおそくよさんぐおあそにんあいんのう市月これべくにても礼
方うぜおそくせいおされ。一時会づくそ
そこい市服病のおそでいなりし。例よう
いその初た妻友まに。えぬくく同医去のとてひ毎日まついてうれべ。
一初そうおさせて出痛治さんぐすべにもくお作てよくみてらぐ
う初次同そうくて男大ぐ目い痛治さんぐ肘いねひおのりてお服よくん
くりおし。ひくく今兵で前同よ初そ
とそいて前今初そくいひうめのそ。ぜよまそみあてお伝なこれね
い今兵いりずくう初次ぐ例によりてうんそごのさ
くう初次同とい。三のは出あいさうるぐ。出一あってござあてうれ。

万海ご那そのきゝにくいおろくに人ていのぐれおくいふろ
いひみやでまかそくろおぼてでおろくしし。
びまくれていろやくにけ出ましてこ入れいで万海うけくろ先。
あよ入ろくに万みご歌くはび毎祝もりおやうくけよろ万海お
さくてでおれなみるれつくりけろ紙。ひごくとサべさまは。ひよ我
ふいよおやでこいよさみてでおたくふおりまそれいこそでなよ也也
ばそ毛いまくで所のはさうの何の正なおて。ごべさ当ふおくいひ。
もとくへのふれうはのつて。称ふのうとゆ
ふ仕れくでまごく指くくふ母のふいいうごろりうるん。
ろれ先人くびそいで万海ごまとうの
をも。ぼ話ちつと一おくまべでろうろ
そこ仕ろつてよそ。初投もさなけ
ま母ふやくるとれろ我るれいび接
ろれしれでそのまくまおそつら母
をた切よふたろ義のはてこの是ものの
弟と守るたおくうやれまていく
引ろのくろ人ご記まろのそまま
万ゆごおつりにば徒よすべそ同
て男にそくふ女公。万海ばびばおそ
ろ人く入祝ふ公。万海ばびばおそ
ろ人く入祝ふ公。万海ばびばおそ
ろ人く入祝ふ



[illegible]合にて[illegible]そのまゝ
千八神色とかしけるのてやにて
神ぢくるべさ。和尚祝化ようそ白ねるれ古曲のまゝ
ゆくれ出ぬのまゝにそうらひべて[illegible]
ようされいぜまおかそれくいまそこの三浦みや
ろへは出ず手ろ和わて今手ろ和
そ和様のまゝれ出ぬ三条とそうれ
手形は出ぬ今ら愛く春にれ
とこうくわ伝てこそ出みくと何を伝てようされべて
ようち和別ぶるまゝ手ろれべよ病
すぐれ和向ろとひろられ出ぬ
是ぢゆくこ同てぬ和ちく[illegible]方ま来とそ行

ぐ。そぬの業い和くは生[illegible]
結ぬまて出ぬ[illegible]
つこと[illegible]
和記ぢろをねまさ出ぬ[illegible]
私こ節れわびろかて毒ま
ぬの出ぬ出ぬ灯明方知今のゆくぜ
ますろを出ぬ[illegible]
ゆうこけ[illegible]
とまて[illegible]
ろれ。浦上伝のまろ[illegible]
いとわくぬそこけのひとはぞぱさ

享保六年　七三月右日

八之巻終

今里塾之跡 五冊
風流寛照卷 五冊
傾城三の二味線 五冊
傾城友三味線 五冊
風流お家 五冊
義経風流猿 五冊
傾城野辺送 五冊
傾城今様尽 五冊
男女保物風流 五冊
雪教者五好 六冊
同流東海硯 五冊
風流西海硯 五冊

此所よまで記しおくといへども
後の
来の女帝に長信衣の裂をせくのの方の歴史其も此所の一流をそゆるを由良後のむ変
不変のこと出て義臣てをけまに出ゐる以下若の相手候之男を画たる事を考えの裂変
我修育後編 全五冊
教訓絵尽 加古川本州細目 全五冊
並に江戸の張をも名て大坂の場所て並の
仏教もて並八其人るめ糖あ井名変に並ある麟亦の衣後の衣のむをやと変の
右之内子の三月ヨリ出ル

風流扇軍 五冊
雷神不動櫻 五冊
紀條時頼二女櫻 五冊
薄雪高尾櫻 五冊
光源氏物語 近日出来 五冊
風流日本荘子 五冊
碁盤忠孝扇 五冊
数情太平記 五冊
三浦之助義村 五冊
玄宗圖蛛夷噺 五冊
右大将頼家記 五冊
弓張月曙櫻 五冊
風流神代巻 近日出来 五冊
阿漕浦三巴 五冊
曽我物語 近日出来 五冊
曙太平記 五冊
花楓紀本地 五冊
小野白雪劔舞 五冊
頼信琵琶軍記 五冊
道成寺波枡 五冊
優源平歌絞 五冊
夕霧布馬松 五冊
百合椎錦鶯 五冊
擅浦女見墓 五冊
歳徳五切の松 五冊
今着出世扇 五冊

續東武錢櫻	五冊	記程拜景櫻	五冊	教訓乞食吉	五冊	貴根源清鶴	五冊
奉書之梅母の	五冊	今昔物語	五冊	遠澤深傳	五冊	風流神仙曾我	五冊
風流東鑑	五冊	賴朝二代鎌倉記	五冊	西海太平記	五冊	中將姬若菜迹	五冊
都鳥妻恋笛	五冊	手護初冠	五冊	高砂大漫臺	五冊	名取紙鎧詞	五冊
那智山之景清	五冊	當世蔕者形氣	五冊	淨瑠璃姬物語	五冊	南蠻秀吉記	五冊
教訓仮名本	五冊	當世司形氣	五冊	淨瑠璃者形氣	五冊	南蠻秀吉日記	五冊
風流川中鴻	五冊	茅之上金梭合	五冊	賴政現在鶴	五冊	御伽太平記	五冊

今川一睡記	五冊	風流軍配團	五冊	世間長者形氣	五冊	百姓盛衰記	五冊
風流庭訓往來	五冊	五老參盤忠信	五冊	時勢富貴形氣	五冊	武松双紙巴	五冊
風流宇治賴政	五冊	歌行脚懷硯	五冊	世間顯屓形氣	五冊	當世信玄記	五冊
花園哥舞妓	五冊	清明白狐玉	五冊	今昔自慢形氣	五冊	日本傾性始	五冊
風流東大全	五冊	當流當我高名松	五冊	長者富貴形氣	五冊	忠孝壽門松	五冊
奥州軍記	五冊	長生伏木隱	五冊	萬福富貴自在	五冊	今昔九重櫻	五冊

當春嫩若物　近日五冊出来
起揚小夜姫　近日五冊出来

明和四丁亥年正月

板元　大坂心斎橋順慶町角　升屋大藏
賣所　京寺町通押小路下ル　金屋治助
　　江戸大伝馬町　鱗形屋孫兵衛

<table>
<tr><td>紫情蓬莱山　五冊</td><td>女訓我見茗鏡　五冊</td><td>於都儀系圖　五冊</td></tr>
<tr><td>陽炎日高川　五冊</td><td>女將七人化粧　五冊</td><td>雛形百種　五冊</td></tr>
<tr><td>夏冬風流雛野橋　五冊</td><td>風流粟花形　五冊</td><td>花競清水詣　五冊</td></tr>
<tr><td>狩衣九誕記　五冊</td><td>花競清水詣　五冊</td><td>敦盛深雪桃　五冊</td></tr>
<tr><td>出世稚児若語　五冊</td><td>前賣二面鏡　五冊</td><td>彩色歌相模　五冊</td></tr>
<tr><td>女郎會稽山　五冊</td><td>女振人絞錦　五冊</td><td>盛久側柏葉　五冊</td></tr>
<tr><td>名玉女誉高　五冊</td><td>記錄曽我　五冊</td><td>十二ヶ月曦当衣　五冊</td></tr>
<tr><td>楠二代壮士　五冊</td><td>真盛曲輪錦　五冊</td><td>若女化粧櫻　五冊</td></tr>
<tr><td>平家　五冊</td><td>教訓廓引合　近日五冊出来</td><td>義貞勲軍配　五冊</td></tr>
</table>